

## 小学校低学年における入門期の係活動の実践と分析

著者	上岡 学, 松井 香奈
著者 (英)	UEOKA Manabu, MATSUI Kana
雑誌名	武蔵野教育學論集
号	9
ページ	9-17
発行年	2020-10-10
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1419/00001341/">http://id.nii.ac.jp/1419/00001341/</a>

# 小学校低学年における 入門期の係活動の実践と分析

Implimentation and Analysis of  
"Kakari-Katsudo (Staff Activities of the Classroom)"  
in the Lower Grade Children in Elementary School

上 岡 学\*

UEOKA Manabu

松 井 香 奈†

MATSUI Kana

## はじめに

係活動は特別活動解説に例示<sup>(1)</sup>されている学級内の担任による任意の活動である。それと比べ、委員会活動は特別活動の内容の一つである児童会活動に位置づけられている<sup>(2)</sup>活動である。学校を外から見たときフォーマルな活動が委員会活動であり、インフォーマルな活動が係活動である。この2つは密接に関係していて、係活動で育てた力が委員会活動につながり、係活動の内容が委員会活動の内容に連動する。係活動をしっかり行っている児童は委員会でも活躍できると言える。

ところが係活動は特別活動解説に例示はされているが任意でインフォーマルな活動であるため、どの学級にどのような係が存在し係活動が行われているかは見えにくい。そこには、プラス面としてカリキュラムに縛られない自由な教育が展開される一方、マイナス面として担任による教育の質の差が大きく表れる部分でもある。

とりわけ、1年生の入門期での係活動の実践の在り方を明確にすることは、学級の生活やその後の学校生活を豊かにしていくために欠かせない視点となる。そこで本研究では、小学校低学年における入門期の係活動の実践とその分析を行うことを目的とした。

## 1. 特別活動における位置づけ

特別活動において係活動は、小学校と中学校とを結ぶ縦の関係 (1) と小学校における係活動と児童会活動とを結ぶ横の関係 (2) とがある。

### (1) 小学校における位置づけと中学校との関係

係活動は特別活動においては、解説において例示として示されている。小学校特別活動の4つ

\* 武蔵野大学教育学部

† 大阪市立新高小学校

の内容の中の一つである学級活動には3つの内容が示され、さらにそれらに具体的な内容がそれぞれに3～4示されている（図1）。

その中で係活動が例示されているのは、(1) イである。(1) イ「学級内の組織づくりや役割を自覚しながら仕事を分担して、協力し合い実践すること。」とある。ここには明確な言葉で示されていないが、特別活動解説には次のように明確に示されている。「例えば、係活動において、学級を楽しく豊かにするために必要な係を出し合い、合意形成によって組織をつくっていくことである。」<sup>(1)</sup>とある。

中学校においてはこの部分に対応する部分は小学校と同様、学級活動 (1) イで「学級内の組織づくりや役割の自覚」であり、内容は「学級生活の充実や向上のため、生徒が主体的に組織づくり、役割を自覚しながら仕事を分担して、協力し合い実践すること。」と「児童」が「生徒」に置き換えられたのみで内容は同一である。

特別活動解説では、「例えば、生徒が話し合って決めた学級の目標を踏まえ、それを実現するために必要な組織づくりや、仕事の役割分担やルールづくり、学級内の組織の意義や活動について話し合って合意形成を図る活動や、分担した役割の計画や成果を学級で共有する方法についての話し合い、各活動の振り返りや改善についての話し合いなどの充実が考えられる。」<sup>(2)</sup>とあり、小学校の発展形であり、係活動という言葉は登場しないが明らかに係活動の延長にある。

図 1. 学級活動の内容

- |                              |
|------------------------------|
| (1) 学級や学校における生活づくりへの参画       |
| ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決        |
| イ 学級内の組織づくりや役割の自覚            |
| ウ 学校における多様な集団の生活の向上          |
| (2) 日常の生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全 |
| ア 基本的な生活習慣の形成                |
| イ よりよい人間関係の形成                |
| ウ 心身ともに健康で安全な生活態度の形成         |
| エ 食育の観点を踏まえた学校給食と望ましい食習慣の形成  |
| (3) 一人一人のキャリア形成と自己実現         |
| ア 現在や将来に希望や目標をもって生きる意欲や態度の形成 |
| イ 社会参画意識の醸成や働くことの意義の理解       |
| ウ 主体的な学習態度の形成と学校図書館等の活用      |

## (2) 児童会活動・生徒会活動との関係

係活動は特別活動の内容に位置づけられている児童会活動や生徒会活動と密接な関係がある。それは前記の学級活動 (1) イと児童会活動や生徒会活動の目標とが多くの部分で共通することからもわかる（図2）。

図 2. 学級活動と児童会（生徒会）活動の比較

学級活動 (1) イ	児童会（生徒会）活動の目標の前半
<p>学級生活の充実や向上のため、児童（生徒）が主体的に組織をつくり、役割を自覚しながら仕事を分担して、協力し合い実践すること。</p> <p>※（ ）は中学校</p> <p>※下線筆者</p>	<p>異年齢の児童（生徒）同士で協力し、学校生活の充実と向上を図るための諸問題の解決に向けて、計画を立て役割を分担し、協力して運営することに自主的、実践的に取り組むことを通して、（以下略）</p> <p>※（ ）は中学校</p> <p>※下線筆者</p>

以上のように、合意形成によって学級を楽しく豊かなものにする係活動は、入門期の子供たちにとって大きな意味をもつとともに、児童会活動とも密接な関係があると言える。

## 2. 係活動に対する教師の思いと特別活動との関連

1 年生は、小学校生活に期待いっぱい入学してくる。入学したばかりの子供たちにとって係活動は、大切な時間である。なぜなら係活動の時間を通して子供たちは大きく成長することができるからである。

係活動は、係という決められた仲間で活動を行う。遊びであれば、各々違うことをすればいいのだが、係では決めた目標を変えるわけにはいかない。複数の保育所や幼稚園から来た仲間との意見が分かれたり、してみたいことが違ったりすることで衝突を経験できる。そうしたことは、集団活動で大切な意見の折り合いや仲間の意見をやってみるといった仲間から学ぶ機会となる。これは人間関係の学びであり、学級活動 (1) アの話し合い活動の前段階の経験である。

また、小学校をよく知るきっかけともなる。「ほけんがかり」であれば、保健室の場所や保健の先生を知り、「ほけんだより」をよく読み、自分が学級みんなにポスターで呼びかけることへとつながる。「としょがかり」であれば、図書室の利用方法や図書委員会のポスターなどから図書室がどんなところなのかを学ぶことができる。こうして係を足場として、子供たちは学校生活をよく知り、自分たちも学級で同じようにやってみる経験へとつながる。

さらに、係活動を通して学級を自分たちで動かすことを知り、やってみたいことを実現できた達成感・喜びを味わうことができる。子供たちには小さな提案であってもそれが実現し、クラスの生活をよりよくできたことの手ごたえは、今後の 6 年生までの学校生活に大きく影響する。これは自分たちの生活を改善する活動であり、学級活動 (1) イの組織づくりや役割の自覚である学級活動 (3) のキャリア形成と自己実現と関連する。

こうした係活動の重要性を踏まえて、入門期ではどのように教師が支え、関わるのが大切となるか、係活動において何を育て、他の活動とどのようにつながりどのように発展するのかを検討したい。以下の実践は 2019 年 4 月より 1 年間の大阪市立 A 小学校の記録による分析である。

## 3. 1 学期の実践記録と教師の行動

（題材）「みんなで遊んでみたい」を大切に学級をつくる

—係活動を通して仲間や小学校と出会う—

(時期) 2019年4月～2020年3月

(場所) 大阪市A小学校

(学年) 小学校1年

## (1) 先生のお手伝いをしたい

入学後の子供たちは、何事にも意欲的である。友達に配るプリントや黒板を消すこと、窓の戸締りや電気を消すことなど先生の手伝いができることに喜んでいて。しかし、何日か過ごすにつれ、どの子もやってみたいという思いが逆に手伝いをどうやってみんなで行うのかが問題になり始めた。同じ子ばかりが電気を消してしまうことや一人の子が配るものを全部持っていくことなどがあった。

そこで、学級活動の時間に担任からお手伝いを係としてしてみないかと提案をした。子供たちと今まで手伝いをしていたことやしてみたいことを出し合い、くばり・おはな・ミニせんせい・ほけん・たいいく・きゅうしょく・せいりせいとん・としょ・でんきの9つの係を行うこととした。係を決める際、学級目標である「いつもポカポカすごくかっこいいなかよしにくみ」になるために、みんなで楽しく活動することを係と呼ぶことを伝えた。

(教師の行動) 子供たちの思いや行動を教師が気づき、それらの仕事や生活に必要なことを学級活動において教師が顕在化させ、整理し、提案する。さらに学級の目標につなげることで生活が有機的につながっていることを確認させている。教師のサポートが重要な役割であることがわかる。

## (2) 係をみんなでするって難しい

係を決めてすぐに「かかりのさくせんかいぎ」を行った。これは、決まった係ごとに担任と話し合い、係で何を取り組むかを定めるものである。活動をやりたいが何をしたらいいのかわからず係の活動が止まることがないように考えた。子供たちに係で何をしてみたいかを聞き、1週間のお試しを行った。

1週間すると、くばり係は配るタイミングがわからず一度も配れなかったことやせいりせいとん係はいつ机を直したらいいのかと戸惑ったといった課題が出てきた。そこで、担任から時間や曜日を決めてみんなでやることを提案した。

そこで、としょ係は自分たちで紙に曜日と鍵を取りに行くメンバーの名前を書いた。忘れるといけないからと教室の柱に貼っていた。徐々に、「くばり係じゃないけど大変そうだから手伝ってもいい?」、「○○くんが(係の仕事を)忘れてるから呼んでくる」と言うように自分たちで助け合いながら係の活動を行っていった。

(教師の行動) 子供たちの活動を整理し、係活動へと組織だて仕事と生活を結び付け、係活動を充実・発展させるためのステップアップを意識させる。係活動を発展させるためのプロセスであることを教師の働きかけにより課題を出させ、次の活動に結びつけている。

### （3）1 学期の締めくくりをしよう

6 月中旬、学校行事のフレンド祭り（1 年生から 6 年生までの縦割り班で店を出す活動）が終わってから「ボーリングをみんなでしてみたい」と A 児から申し出があった。A 児は、ボーリングが大好きで保育園で作ってみんなで遊んだ経験があり、学校行事であるお祭りでお店役が物足りなかったとの思いからの発案であった。そこで担任から「1 学期の頑張ったねパーティーをしよう」と投げかけた。各係でやってみたい遊びを考えてお店を出して遊ぼうと決めた。出し物は、風船キャッチや紙飛行機レース、ビンゴ、宝探し、ボーリング、UFO キャッチャー、魚釣り、スーパーボールすくい、ドッジボールの 9 個が決まった。

学校行事でフレンド祭りを行っていたこともあり、お店の看板やルールをすぐに作っていた。ただ、準備ばかりに目が行っていたので、担任から一度自分たちで遊んでみるようにと伝えた。すると、飛行機レースの位置がバラバラであったり、そもそも紙飛行機があまり飛ばなかったりするなどの問題も起きた。また、スーパーボールすくいでは、本物のスーパーボールを持ってこようと考えていた。しかし、学校には持って来られないため、どのように作るかも考えなければならなかった。教室にある画用紙や袋などを利用したり、ルールの内容を考えたりすることで子供たちの集会活動を成功させたいとの思いは強くなっていった。

（教師の行動）係活動のまとめをどこで行うかは重要な点であるが、教師は 1 学期の終盤に設定している。学校行事でのやり切っていない気持ちやエネルギーを自分たちに向けさせる学級独自の企画は思いつきのようだが十分考えられた企画である。この企画に係活動をリンクさせているところが教師の一つのまとめの意識である。



スーパーボールすくい



風船ゲームの説明の様子



紙飛行機

### （4）もっとしたいことがある

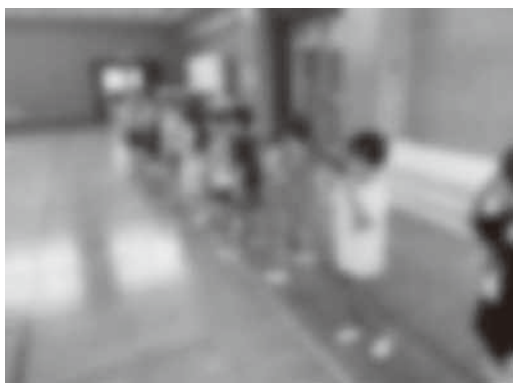
「頑張ったねパーティー」は、子供たちがのびのびと遊べるように講堂で行った。運動場や教室と違い、たくさん線が引かれていることから次第に、「黄色の線で投げて」などとルール作りへと発展した。

集会活動後、口頭での振り返りを行った。子供たちからは「楽しかった。もっとしたかった。」との意見が多かった。中には、「もっと変えたいことがある。」と言う子もいた。以下に子供たちの振り返りを載せる。

- ・楽しかった。みんなでできて嬉しかった。



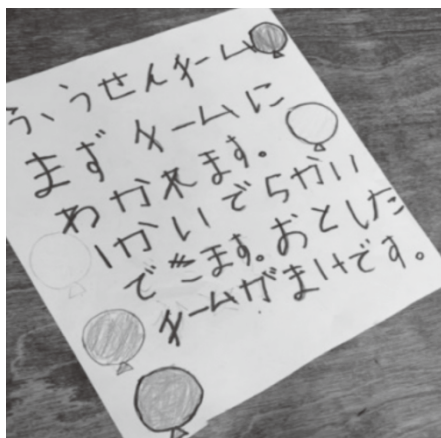
- ・もっともったしたかった。遊ぶのをもっと増やしたい。
- ・ルールを守らない人がいたから守って欲しかった。
- ・ビンゴをくだものバージョンにしたい。
- ・ビンゴは国旗や数字のバージョンもしたい。
- ・もっとビンゴがしたい。時間が少なかった。
- ・紙飛行機を折り紙で作ってレースしたい。色がある方がきれいだと思う。
- ・風船を2個に増やして遊びたい。



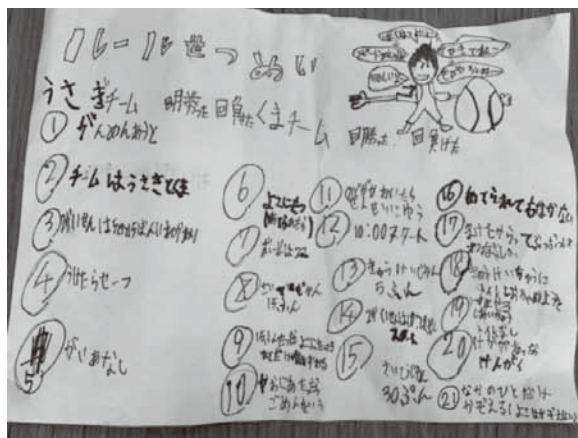
紙飛行機とばしの様子



ビンゴゲーム



風船ゲームのルール



ドッジボールのルール

(教師の行動) 振り返りを行うことでまとめから次へつながる発展へと意識させている。これは 2 学期の係活動へと意識をつなげるために重要な活動である。

## 4. 教師の行動の特徴

### （1）機会をとらえて教師から提案する

係活動は、子供の主体性を大事にすることが重要である。そこで子供の「やりたい」が生まれるのを待って、担任からお手伝いを係としてやってみないかと提案をしている。子供たちが自分達のしたいことを担任が支えてくれようとしていると感じられるように提案の機会を吟味した。主体性を重視しつつ、子供たちの意欲や力を適切に引き出すために教師は子供の様子を観察し、適時に「やってみないか」というような引き出す指導言を発している。

また、活動の継続には教師の出番が何度か必要となる。そのために「かかりのさくせんかいぎ」でやることを一緒に考えてみたり、休みの時間に子供たちと話して進捗状況を確認したりすることが有効であったと考える。困った時に教師にすぐに聞ける機会があることが必要となる。

### （2）活動のモデルを示す

1 学期では、学校行事であるフレンド祭りを活動のモデルとしてお楽しみ会を行った。子供たちは、お楽しみ会での準備として、縦割り班で作ったお店の看板やルールをイメージしながら作っていた。合わせて、作ったポスターを自分たちで読んでみたり、自分たちで作ったルールで一度遊んでみたりするといった見直しも大事だと気付いた。こうした集会活動が係活動で取り組む活動を支えることになった。

中でも縦割り班活動は、一番下級生である 1 年生はお客さんとして上級生が扱ってくれる。上手くいくように下準備をして一緒にやってくれているので、自分たちにもすぐにできると 1 年生は思う。しかしながら、上級生がいない場でやってみると、字もどうだったか、ペンはどう使おうかと小さな悩みがたくさん出てくる。先行した上級生の活動があるから係活動での試行錯誤や振り返りが意味をもってくる。

### （3）試行錯誤の場を用意する

係活動の日は週に 1 回である。45 分間の授業で 5 分間何をするのかの目標の話し合い、残りの 40 分間が係の活動時間とした。40 分間程度の活動時間を確保することによって、没頭して係活動を行えるようにした。また、お楽しみ会といった集会活動を学期ごとに行うことによって、36 人の前で話したり、まとめたりする経験を身に付けることができた。失敗してもまた挑戦できる機会を用意することによって、よりよいものにしたいとの気持ちが高められた。

## 5. その後の展開（2 学期～3 学期）

### （1）生活科との連携

2 学期は「ハロウィンパーティーをしたい」と子供たちから提案があった。1 学期で行ったお楽しみ会では、教師の介入が多かった。例えば、一度考えた出し物を自分たちでやってごらん、看板だけが準備できていたらいいのかなといった声掛けを頻繁に行っていた。そこで、2 学期は自分たちで運営する意識をもたせるために教師があまり介入せずに行ってみた。ここには児童の



成長を感じ取り、介入を減らす段階的な指導が取り入れられている。

出し物は、「おばけやしき」(段ボールのおばけをみつけて時間内にタッチするもの)、「どんぐりのまとあて」、「どんぐりめいろ」の3つであった。口頭での振り返りを行ったところ、「楽しくなかった」という感想が多かったのである。教師からの声掛けがなかったため、準備して出し物を出せたグループが3つしかなかった。そのため、混んでいて全然遊べなかったり、お客さんが来て遊びに行けなかったりして、1学期のお楽しみ会のように楽しめなかったのである。ここで振り返りを行っているが2つの側面がある。一つは子供たち自身のフィードバックである。そしてもう一つは教師の行動に対するフィードバックである。ここで軌道修正を行い、次の指導につなげる。



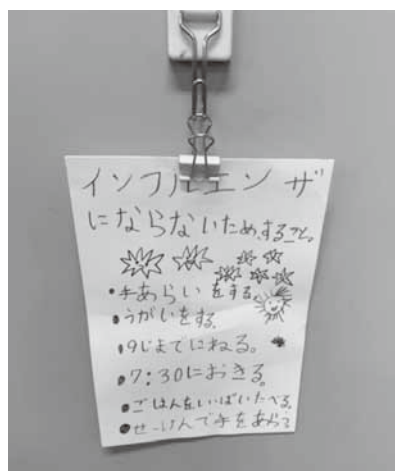
お楽しみ会の様子

そこで、今回は、みんなで出し物を出してもう一度お楽しみ会をしようと決まった。11月になると、ハロウィンパーティーはできないので、生活科「あきのしるしさがし」(秋みつけの単元)で、見つけてきたあきのものをつかったおもちゃのお楽しみ会(あきのしるしパーティー)にしようとなった。準備をしっかり行おうと楽しいお楽しみ会ができるとわかった子供たちは生活科の時間や休み時間を使って出し物の準備を頑張った。

その結果、「落ち葉の時計やさん」、「落ち葉の水族館」、「クレーンゲーム」、「たからさがし」、「こままわし」、「えあわせ」、「追いかけてこやさん」、「UFO キャッチャー」、「どんぐりめいろ」、「どんぐりのまとあて」、「まるつかみ」、「さかなつり」、「図鑑からいわれたあきのしるしあてるゲーム」の13の出し物ができた。この経験は子供たちにも大きかったようで、楽しかった、お客さんがもっと来てくれるように工夫したいとの思いにつながった。結果、ふゆのしるしパーティーへとつながった。

## (2) 上級生から学ぶ

3学期は、お楽しみ会だけでなく係活動の充実にも取り組んだ。保健係は、保健室に貼ってある掲示からインフルエンザの予防ポスターづくりを行い、図書係は図書委員会の壁新聞からおすすめの本を紹介する本をつくったりすることにつながった。体育係は、運動場と講堂によって持ち物が違うことから持っていくものをつくって背面黒板に掲示した。こうした、係活動の充実には上級生の姿や委員会活動が大きな意味をもった。子供たちに積極的に上級生の活動を見るように話したことが大きいと考える。



予防のポスター

## おわりに

係活動は委員会活動に比べインフォーマルで活動の実態は見えにくい。その分、教師は自由に教育ができるが力量の差が出る。本実践はその見えにくい係活動の実践の記録であり、分析である。

本実践のように係活動を丁寧に育てていくことによって委員会活動で活躍でき、グループ活動で力を発揮する。「どうしてあのクラスの児童は話し合いが上手なのか？」と不思議に思うことがあるが、そこには種も仕掛けもない。きちんと丁寧に係活動など見えないところで様々な力を育てているのである。

## （引用文献）

- (1) 文部科学省 (2018) 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説特別活動編』 p.50
- (2) 文部科学省 (2018) 『中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説特別活動編』 p.48

## （参考文献）

- (1) 文部科学省 (2018) 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説特別活動編』 p.50
- (2) 文部科学省 (2018) 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説特別活動編』 p.87
- (3) 静岡教育サークルシリウス (2015) 『子供がいきいき動き出す！係活動システム&アイデア事典』  
明治図書出版
- (4) 羽豆成二 (編著) (2004) 『図解 学級経営 学級生活編』 東洋館出版社